

## 会派視察報告書

令和4年10月21日

篤心会 石川 智子

1. テーマ 第84回全国都市問題会議 個性を活かして「選ばれる」まちづくり  
～何度も訪れたい場所になるために～
2. 日程 令和4年10月13日(木)～令和4年10月14日(金)
3. 会場 長崎県長崎市 出島メッセ長崎
4. 主催 全国市長会 後藤・安田記念東京都市研究会 日本都市センター 長崎市
5. 内容

～1日目～ 10月13日(木)

### ◇開会式

### ◇基調講演：民間主導の地域創生の重要性

株式会社ジャパネットホールディングス 代表取締役社長兼 CEO 高田 旭人 氏

#### ・「なぜジャパネットが、地方創生を？」

2017年より長崎のプロサッカークラブV・ファーレン長崎の運営を始めたことをきっかけに、地域を盛り上げていきたいという気持ちが強くなった。そして、プロサッカークラブの運営を通して、通信販売のみならず、スポーツやまちづくりにおいても、事業方針として掲げている「見つける」「磨く」「伝える」を活かすことができるのではないかと考えるようになった。地域の魅力的な資源を見つけ、それを徹底的に磨き上げ、全国各地の方に伝えていくことで、長崎の活性化に貢献できると考えている。

#### ・地方創生事業

2020年に長崎初のプロバスケットボールクラブ長崎ヴェルカを立ち上げ運営し、現在は長崎駅前にスタジアム・アリーナや商業施設、ホテル等で構成するまちづくり「長崎スタジアムシティプロジェクト」を進め、2024年の開業を目指している。

#### ・行政と民間の役割の違い

長崎を盛り上げたい。そのために、人口を増やし、経済を活性化し、地域資源を活用して地域の魅力を広く伝えていきたい。民間企業も行政も、目指すゴールは同じだと思うが、そこへ行きつくための手段や役割は大きく異なる。行政は、福祉を充実させ、皆が平等公平に恩恵を受けられるような環境を目指している。民間企業は、その安心できる環境があるからこそ、多くのことにチャレンジできる。良いと思ったものには自らリスクをとり、最短の意思決定で取り組んでいけることも大きな特徴の一つ。行政にはできない思い切った取り組みをする必要がある。

#### ・長崎スタジアムシティプロジェクトへの想い

灯台下暗しというように、実は目の前に素晴らしいものが眠っていることに気づいていない長崎で暮らす方に、長崎の可能性をもっと信じてほしい。眠っている素晴らしい地域資源に磨きをかけ、工夫を凝らしながら伝えることで、長崎は楽しそう。行ってみたい。と思ってもらえると考えてい

る。また、目指すスタジアムシティは、観光客向けのみではなく、地元の方にも気軽に来て楽しんでほしい。

- ・前例のない未知の世界へ飛び込む  
民間企業としてリスクをとり本気で進めることで、地方でもできるという実績をつくり、そこから他の地域に波及させていきたい。
- ・住み続けたくなる地方都市になるために働き方改革  
休日改善、働き方の多様化、残業時間減、社員のランチプレゼント、卵子凍結費負担を最大40万円補助、整理整頓(断捨離)、ノー会議タイム導入、集中ルールの設置。
- ・全国を盛り上げる地方創生の展開
- ・行政に期待すること  
民間企業のみではできないことを、「地域の活性化」という同じ目的をもって一緒に理想の地域創生を実現したい。

#### ◇主報告：長崎市の魅力あるまちづくり

長崎県長崎市長 田上 富久 氏

- ・ネットワーク型コンパクトシティ  
長崎のこれからのまちの活性化、活力と暮らしやすさの維持。  
生活地区に地域拠点をおき、都心部とネットワークをつなげることで、どこに住んでいても都市機能を使える。
- ・それくらいが心地良い長崎サイズ  
陸の玄関、海の玄関、母屋、スタジアムシティ。
- ・価値観の多様化  
人口減少、少子高齢化などの課題に加え、新型コロナウイルス感染症の流行による行動制限や経済の低迷、ポストコロナ社会への対応など、さまざまな変化に対応することが求められている中、さまざまな変化に対応することが求められている。コロナ禍で成功している事例として、世界中の関連宿泊施設を利用し、旅行や仕事ができる定額制の住居提供システム HafH は、2019年に長崎で生まれた滞在の仕組み。
- ・4つの視点で価値を見つめ直す  
「価値を見つける」 2015年に世界遺産に認定された端島炭坑(軍艦島)  
2021年10月に開業した長崎市恐竜博物館(長崎と恐竜という新たな価値)  
「価値に気づく」 長崎さるく(「さるく」とは「ぶらぶら歩く」という方言)  
長崎市に散らばる魅力を見つけながら歩くもので、住んでいる市民が地域資源の価値に気づかないと持続可能な観光は実現しないという思いから、市民参加による企画やガイドにより、まち歩き観光の先駆けとなった取り組み。これにより、暮らす人にとっては身近にありながらも、気づいていない価値に気づくことで、まちへの愛着につながった。

「価値を磨く」 全国でもほとんど例がない景観専門監制度の導入。

(一般社団法人地域力創造デザインセンターの高尾忠志氏着任)

職員の景観に関する意識の醸成と公共デザインの指導・管理に携わる。

まちにあるものの価値を磨く取り組みの積み重ねで、まちの価値をさらに高めることにつながる。

「価値を生み出す」 新しい価値を創造する、長崎スタジアムシティプロジェクト、長崎大学が進めるBSL(バイオセーフティレベル)ー4施設の稼働。

さかのうえん(斜面地の老朽空き家除去後の跡地を有効活用した農園)

ネガティブに捉えられていた地域課題をポジティブに捉え直すことにより、地域活性化などにつながっていく。

#### ・交流

まちの価値に気づく契機には「交流」が欠かせない。

暮らす人、訪れる人がまちをともに感じ交流することにより、日常では見つけにくいその都市ならではの新しい価値が見つかり、磨かれ、価値が創られていく。

交流の中で価値を見つめ直し、ここにしかないちょうどいい長崎らしい暮らしやすさ＝長崎ライフがより豊かなものになることで、暮らす人にも訪れる人にも魅力的なまちとなる。

#### ◇一般報告：何度も訪れたい場所 都市の新たな魅力と関係人口

島根県立大学 地域政策学部准教授 田中 輝美 氏

#### ・これからを考えるヒント

①名前が覚えられる規模(量より質)

②準備から片付け、打ち上げまで一緒に(脱・お客様は神様)

③住民の思いや背景も伝える(ストーリー化)

商品を買うだけでなくその裏にあるストーリーを買う。

#### ・背景にある二つの変化による新しい潮流

地域の変化(人口減少で開放性を持つ)、若い世代の変化(つながりに関心を持つ)

#### ・東京で起こっていること

ふるさとがほしいと思っているふるさと難民が増えている。

ふるさとにアコガレ。

#### ・ふるさと難民の行動

休学して半年間から1年間、地域インターン(移住と旅のあいだ)へ。

旅では物足りない、人と関わりたい、でも移住できない。観光以上定住未満。

#### ・3つ目の柱としての関係人口

2016年に生まれた新しい言葉。都市住民の課題解決策であったが、地方にも生かせるといい。

これまでの2本柱は、交流・観光(短期的に来る人)と移住・定住(長期的に住む人)。3つ目の柱は関係人口(継続的に関わる人)。限られていく担い手をシェアする。

関係人口の関わりのパターンは、 買う・行く・働くの3つ。

- ・つながりこそ資源

関係人口の候補者、予備軍（地域に関わりたい都市若者、生まれ育った出身者、転勤・進学で住んだことがある人）はたくさんいる。

- ・関係人口が生まれる新しいインフラ

関係案内所(ゲストハウス、カフェ、コワーキングスペース、シェアハウス、シェアオフィス)  
必要な機能(関係案内人を中心としたコミュニティ、公共交通機関特に鉄道、最低限のインターネット環境)

- ・コロナ時代こそ大切にしたい

1. とりあえず関係人口 は避ける
2. 近く(県内・市内)の関係人口に目を向ける
3. 通う以外の関わり方も実験してみる(長続きする)

- ・時代は変わった

つながりがほしい、地域に関わりたいという人たちがいて、つながりは価値となっている。  
それを生かすか生かさないかは地域次第。

◇一般報告：ビジョンを活かしたまちづくり ～「選ばれる山形市」を目指して  
山形県山形市長 佐藤 孝弘 氏

- ・選ばれるまちになるために

- ①他にないまちの魅力を磨いて発信する
- ②具体的な施策を打ち出す
- ③ビジョンと具体的な施策のリンクに徹底してこだわる

- ・山形市の2大ビジョン

1. 健康医療先進都市
2. 文化創造都市

- ・ビジョンを掲げた上でそれを具体化する事業、政策を次々と展開

それに呼応して市民・企業の方向性に合致する取り組みをはじめ、まち全体の個性が濃くなる。

- ・ビジョンを伝えるには

市内30地区市政懇談会、経済団体会議での講話を通して伝える。  
市役所1500人研修を実施。

◇一般報告：「交流の産業化」を支える景観まちづくり ～長崎市景観専門監の取り組み～  
一般社団法人地域力創造デザインセンター代表理事 高尾 忠志 氏

- ・次のまちづくりへのエネルギーになる

①公共事業のデザインを指導・管理

②職員の人材育成

・単に安全、満足では認められない

先人の考えに現在の考えをたして、実現させる。手を入れることで完成度が高まるように、全体の完成度を高める。

・思いを紡ぐ

その当時の思いの糸を再度引き出し、一緒に編み出し創り出していく。

思いを持って仕事に励めば、小さな予算の事業でも工夫次第で新たな価値を生み出せる。

・「部分」を変えることでまち「全体」がよくなっていく

鍋冠山公園のバリアフリー化、稲佐山電波塔ライトアップ、まちなか夜間景観整備、長崎駅周辺整備事業など。

・景観専門監とは

職員に伴走する家庭教師のような存在で、インハウススーパーバイザー。

～2日目～ 10月14日(金)

◇パネルディスカッション

【テーマ】個性を活かして「選ばれる」まちづくり ～何度も訪れたい場所になるために～

【コーディネーター】東京都立大学法学部教授 大杉 覚 氏

【パネリスト】 ゆとり研究所所長 野口 智子 氏

山梨大学生命環境学部教授 田中 敦 氏

NPO 法人長崎コンプラドール理事長 桐野 耕一 氏

岐阜県飛騨市長 都竹 淳也 氏

兵庫県伊丹市長 藤原 保幸 氏

ゆとり研究所所長 野口 智子 氏

ものづくり、ことづくり、それぞれの人と人のつながりがほとんどなく、知っているようで知らないことが多いので、その人たちがつながると掛け算で広がっていく。

・雲仙人サロン

・フルーツ・ツーリズム(和歌山県紀の川市)

山梨大学生命環境学部教授 田中 敦 氏

ワーケーションは地域課題解決策であり、関係人口を増やすためのツールであるが、企業としては取り入れるメリットが考えられないために増加せず。2020年7月、菅首相の発言で注目される。コロナ禍でさらにニーズも高まり、2025年度には4000万規模の市場になるかとも言われている。

NPO 法人長崎コンプラドール理事長 桐野 耕一 氏

・まち歩き

2006年長崎さるく博で長崎市民500人がガイドを務め、普段暮らしているところを歩くこ

とで、市民がわが町の良さに気がつくことができた。

- ・まちを歩くことはまちを見つめること

まち歩きはまちづくり。新しいまちができていく変革の時こそ、まちづくりが必要。

岐阜県飛騨市長 都竹 淳也 氏

- ・ファンクラブをつくる

人口減少と高齢化率が全国に先駆けて進んでいる地域だが、地域外の人との交流を増やすことで、関係人口が増加した。

- ・地元の熱い想いを知ることができた

飛騨を愛する人と出会えて楽しいという市民の新しい発見につながった。

兵庫県伊丹市長 藤原 保幸 氏

- ・伊丹の個性を活かす

清酒発祥の地、伊丹大使制度

- ・イメージ戦略、PR 戦略も大切

#### ◇閉会式

#### ○所感(知立市への反映等について)

今回の第84回全国都市問題会議は、個性を活かして「選ばれる」まちづくり～何度も訪れたい場所になるために～のテーマで長崎県長崎市での開催でした。長崎市は、九州の西端、長崎県の南部に位置し、面積は405.86㎢、人口は約40万人を有する中核市。商業・業務機能が集積した長崎港内の平坦な中心部と、長崎港を中心としたすり鉢状の地形に形成された斜面市街地とがあいまって、独特の都市景観が形成されています。第二次世界大戦後は世界に2つしかない戦争被爆地として、核兵器廃絶と世界恒久平和を訴える国際平和文化都市としての役割を果たしています。

長崎のまちは、約450年前の開港から現在まで、港を通じて多くの人々を受け入れ交流することで栄え、国内外のさまざまな文化を取り入れながら、豊かな個性をもつ観光都市として発展してきました。しかし、時代が進む中で人々が都市を訪れる目的が多様化し、現在は「昭和の観光都市」から変化を遂げ、「選ばれる21世紀の交流都市」への進化を目指しているところです。

長崎のまちは、市民がまち歩きをきっかけに、そこで暮らす人が気づいていない、自分たちの暮らしに溶け込んでいる地域資源に気づき価値だと認識することで、それがまちづくりにつながっていきました。地域資源に気づき、その価値を高めることは、まちの外から来る人(観光客)のためだけでなく、そのまちに住んでいるまちの人のためでもあるということは、実際のところ見落としがちな点であり、シビックプライドにもつながる非常に重要なことであつたと改めて感じました。地域資源の価値を高める取り組みには、地域課題をポジティブに捉えて解決に取り組むことや、新たな価値を創造することなどが挙げられます。本市においても、多くの地域資源があるにもかかわらず気づかずにいる現状を把握し、価値として見つめ直してまちづくりにつなげていきたいと考えます。まちの変革の時こそまちづくりのチャンスだと捉えていきたいです。

また、限られていく担い手をシェアする関係人口という考え方は、今後早かれ遅かれ来るであろう人

口減少に対応していくための地域活性化策であり、大変重要な考え方だと認識しました。ふるさと難民と言われる若者が増え、つながりがほしい、地域と関わりたいという人たちがいるということは、つながりこそ価値であると言えると思います。人とのつながりは、コロナ禍で分断された時期を経てより大切なことであると再認識されている中、地域でどう活かしていくべきなのかを考えていきたいと思っています。

今回学んだことを活かし、行政、民間、市民のみなさんと連携し地域全体の活性化を図り、知立市の魅力あるまちづくりに取り組んでいきたいと考えます。